

東南アジアの漆器

宇都宮大学教育学部 教授 松島 さくら子

木村定三コレクションには、東南アジアに分類される漆器が9点ある。東南アジアの漆器は、形状や装飾に特徴のあるミャンマーの漆器と、制作場所や年代が特定しにくいその他の漆器に区分される。特定しにくいその他の漆器は作品自体に銘はない。箱の紙の蓋覆に木村定三氏の筆により「シャム」(タイ王国の旧称)と記されているものは、かつてタイのアユタヤに14世紀中ごろから18世紀頃まで日本人町があり、朱印船貿易による交易品の中に、多くの陶磁器や漆器が含まれていたことや、その後も20世紀半ばまで「シャム」という国名が続き、日本との交易があったことから、タイで制作された或いはタイ経由でもたらされた可能性がある。本稿では、生産地の明らかなミャンマーの漆器に注目したい。



ミャンマーの漆の木(シャン州)

東南アジアの漆樹は、主にベトナム・タイ・ラオス・カンボジア・ミャンマーに分布し、西はインド北東部とブータンに及ぶ。日本や中国の漆はウルシ科ウルシ属のウルシノキ、ベトナムはアンナンウルシ、タイやミャンマーはビルマウルシの樹があり、これらの樹の幹に傷をつけ採取した樹液を塗布したものが漆器である。東南アジアでは、漆樹の分布と同様、ベトナム・タイ・ラオス・カンボジア・ミャンマー等の国で漆器が生産され使用されてきた。

ミャンマー語で漆液のことを「ティスイ(thit-si)」といい、*Gluta usitata* (*Melanhorrea usitata*)という木の樹液である。日本ではビルマウルシと呼ばれている。タイ北西部からミャンマーのシャン州、カヤー州、カイン州などの標高1000メートルくらいのところに多く分布するほか、ミャンマー北西部のカチン州にまで広域にわたっている。主成分はチチオールという成分で、水分・ゴム質含窒素物が含まれており、ラッカーゼ(酵素)の働きによりチチオールが空気中の酸素と酸化重合して硬化する。乾燥には一定の湿度が必要であり、数日から1週間かかる。いったん乾燥すれば丈夫で、黒く艶のある塗面となるのがミャンマー漆の特徴である。

ミャンマーにおいて漆器は「ユン(yun)」と呼ばれる。当コレクションにもある供物用器、キンマ(コショウ科の植物の葉に檳榔樹^{ビンロウジ}の種子や石灰などを包んで噛む嗜好品)を入れる筒型の器(kun it)のほか、箱、皿、椀などの器類や、発酵茶(食べるお茶)や薬味を入れる

仕切りつき器、キャビネットや机などの大型の家具も作られている。ミャンマー人の9割が敬虔な仏教徒であることから、供物器は仏教行事に欠かせない。供物器だけでも様々な形状があり、仏塔型足付供物器 (daung-baung)、仏塔型重ね供物器 (hsun-ok)、高坏型供物器 (kalat or daung-lan) など実に異国情緒溢れる。

ミャンマー最大の漆器生産地はマンダレー管区バガンで、華麗な装飾を施した漆器が数多く作られている。またザガイン管区チャウッカでは、日常使いの装飾の少ない黒漆塗りの漆器が多い。シャン州の数カ所では、シャン族やインダー族によって、当地の民族が使用する供物器や家庭で使用する漆塗りの籠や笊などが生産されている。当コレクションの漆器は、チャウッカとシャン州の漆器に分別される。

漆器の素地は、節と節の間の長い種の竹を薄く割り、編む或いは捲いて成形し、下地、塗りを施した籃胎が主で、馬の尻尾の毛を編んだ馬毛胎、木胎、鉄板を叩き鉢型に成型した金胎、布や木粉等を使用した乾漆もある。漆塗りは素地固め後→下地 (荒目) →下地 (細目) →研ぎ→下塗り→中塗り→上塗りと、およそ12~15工程あり、数ヶ月から半年を要する。

現代のミャンマー漆器の装飾技法は、蒟醬 (kanyit)、金箔で文様を表す技法 (shwei zawa)、漆と骨粉や靱殻灰などを混ぜたものをレリーフ状に盛り上げる技法 (thayoe)、ガラス象嵌、漆絵、過去の日本との交流から作られるようになった変り塗り、卵の殻を塗面に貼付ける卵殻がある。近年では黒漆の上に朱漆を重ねて塗り、研ぎだして下の黒漆を見せる根来塗り風の器も制作されている。蒟醬は黒・朱などの漆を塗った面に、刃物で細かな彫り傷をつけていき朱・緑・黄の色漆や顔料をその傷の中に埋め込み、硬化後に研ぎ出し、文様を表す技法でミャンマーの漆器の多くに使われている。草花などの植物、鳥獣や仏陀伝、ジャータカや民間伝承に関わる文様が描かれる。当コレクションの黒漆花文仏



ミャンマーの代表的な漆器
蒟醬、箔絵などの装飾が特徴 (バガン)



竹を巻いて成形するミャンマー漆器の
素地づくり (チャウッカ)



漆塗り工程 刷毛は使わず通常素手で塗る
(インワ)

塔形供物器 (No. 97)、蒟醬花文合子 (No. 94)、蒟醬鳥文八稜花形盆 (No. 101) にこの技法が使われている。蒟醬鳥文八稜花形盆の蒟醬はミャンマーのものとはデザインや色の組み合わせが異なる。黒漆地に朱で花鳥文が施されており、ランナータイ(チェンマイ)で伝統的に制作されている蒟醬(lai khut) の特徴が顕著である。かつて朱印船貿易による交易品として日本に伝わったとされる蒟醬が施された漆器が「蒟醬手」と呼ばれ、茶人に珍重されるようになり、やがて玉楮象谷により蒟醬技法が日本でも開発され制作されるようになった。茶道に造詣の深い木村定三氏は、東南アジアの漆器を手にし、数百年前にはるばる旅して日本へ伝わった蒟醬手に思いを馳せたのではないだろうか。



蒟醬彫りの様子 (バガン)



供物器を頭にのせ、寺院に向かう女性 (バガン)



仏壇前の供物器 (シャン州タウンジーの商家)

東南アジアの漆器 (本文pp. 36-38)



ミャンマーの漆の木
(シャン州)



ミャンマーの代表的な
漆器 蒟醬・箔絵などの
装飾が特徴 (バガン)



竹を巻いて成形するミャンマー漆器の
素地づくり (チャウッカ)



漆塗り工程 刷毛は使わず通常素手で塗る
(インワ)



蒟醬彫りの様子 (バガン)



供物器を頭にのせ、
寺院に向かう女性
(バガン)



仏壇前の供物器
(シャン州タウンジーの商家)